

## 土屋二郎宗遠一族の供養碑

相州土屋氏の始祖土屋三郎宗遠公は、桓武平氏支流中村莊司宗平の三男として、大治二年（一一二八）相模国大住郡中村郷（現中井町）に生まれた。長じて武闘に志し、当土屋郷に本拠を置き、「土屋」の地名を以つて屋号（姓）とし、三浦義継の女を妻とした。一方、土肥郷（現湯河原町）に本拠を置く兄土肥次郎実平らとともに、西相模一帯の強力な一陣営を為し、関東武士団として成長していった。

治承四年（一一八〇）源頼朝の平家討伐の旗本（石橋山の合戦）から、兄実平らとともに頼朝側近の武将として富士川の合戦、一ノ谷の合戦、屋島・壇ノ浦の合戦など数多くの戦に出陣し、鎌倉幕府樹立に貢献した。以後、宗遠公の後裔は、代々鎌倉幕府の要人として仕えたが、建保元年（建暦三年・一一二二）には、「和田の乱」に組み込まれた土屋次郎義清ほか家の子弟党たちが討死して、土屋氏に動揺が走ったことは否めない。宗遠公は熊野神社を勧請創建し、大乘院を再建するなど善行に励み幾多の功績を残したが、晩年は、時勢の変転してゆく様相を眺めつつ静かに余生を送り、將軍実朝の邸を訪ね、昔物語などに時を過した。実朝の私家集「金槐和歌集」からは、宗遠公の当時の様子をつかがい知ることができ。

やがて老境に達した宗遠公は、空阿と号し、菩提寺として阿弥陀寺（現芳盛寺）を創建した。そして、建保六年（一一二八）八月五日、九十歳の高齢でこの世を去った。

時は移り、足利氏の室町幕府時代の明德二年（一三九一）には、山名氏の反乱に組み、十二代宗貞と郎党五十有余人は討死の痛手を受け、山名氏の敗退により、土屋氏は所領を没収された。また、応永の度重なる戦乱に勢力を失い、応永二十三年（一四二六）には、上杉禅秀の反乱に組み、戦運を懸けたが、上杉氏が敗れ大森氏が小田原城主になり、土屋氏の時代は終幕を迎え、当地に栄えた土屋氏は各地に離散したといわれている。

以来、およそ六百年の星霜を深い樹林に抱かれた土屋一族の墓は、土屋氏ゆかりの人達に見守られてきた。この一帯は館跡と伝えられ、一族の供養塔もこの一角に散在していた。昭和十年（一九三五）頃、杉林を開墾して畑にした当時、故杉山鐸之助氏を中心に、供養塔を現在地に収集移設し、現在に至っている。

昭和六十三年（一九八八）三月吉日

土屋二郎宗遠公遺跡保存会